おあんものかたり
おきくものかたり

菱湖題簽

り傍5
942

於安無物語
於幾久物語

藏版 萬笈書屋

伊 り 942 門 巻

おあむ物語

子どもあつまりて。おあん様。むかし物がたり
なされませといへば。おれが親父ハ。山田去暦と
いうて。石田治部少輔殿に奉公し。あふみの彦
根に居られしが。そのゝち。治部どのの謀反の時。
美濃の國おほ垣へこもりて。我々みな
〳〵一所に御城に居て。おそろしやつゝこの不思議な
すが。おそろしやつゝこよなく。九つ時分に。[illegible]もな
く男女三十人ほどの者まで。田中兵部どのゝ

う。田中兵部殿のうと。おあんきゝて。そのあらまして。わつ
どゝうてなく声がよはりして。おそろしく。おどろ
しやく。おそろしう。おじやつた。その後。家康
様より。せめ衆。大勢。城へむかはれて。いくさの夜
ひるおそろしきものゝ。その寄手は。大将。田中兵
部殿じやと申す。おそろしや。何かし。火矢放ちかけ時に
しる近所を触廻りて。おそろしいことはない。ぜ
ありや。石火矢をうてば。櫓もゆるゝうごき。地もさ
けるやうに。すさまじいさかいに。気のよわき婦

人などは。即時に目を廻して。難儀した。それ
ゆゑ。まへ〳〵このかたにふれて。おいあかし。あとあとあれ
ば。ひのりものゝでて。このみなり鳴をきゝつやう形
心して。おそろしやつて。はじめのほどは。いきたこ
こちもなく。きびしきものゝ。おそろしや。こはやと斗。
まし。おそろしさが。のち〳〵はなんとも。おもはなん
じや。なんの。これ母人も。その外の家中の内儀むす
めたちも。みな〳〵。天守に居て。鉄炮玉を鋳候
しも。また。味方のとつた首を。天守へあつめら

てそれ〳〵に札をはりて。覚へおき。さい〳〵くびに
おはぐろを付て。おじやる。それハなぜなりや。むかし
ハ。おはぐろ首ハよき人とて。賞翫した。それ故。しら
歯の首ハ。おはぐろ付て給はれと頼まれておじ
やつたが。首もこはいものでハあらない。その首ど
も。血くさき中に寝たことでおじやつた。ある日。
よせ手より。鉄砲うちかけの汁。最早けふハ城ぞおち
はんとやす。殊乃外の。しろのうちハさはぎつぶさ
わぐで。おじやつた。その時さハ。おとな衆来て。敵この

げなく。さりとはしこはや。おさなき心でなかしな。
志づまりかへつて。所へ鉄砲玉来りて。されら
おらが。十の才になりしもの。あたりてそのま
ま。ひり〳〵として。死でおじやつた。扨もむごい
事共見て。おとなしつこのうち。其日まての親父乃も
ち口へ。矢文来りて。去暦子ハ。家康様へ手な
らひの御師匠申されしゆゑ。あるもおぢやれ
どよ。城をのがれたくバ。のがれよ。何方
へなりとも。おちよ。路次のまづらひも。仕候

じ。諸手(もろて)へ。おほせ置(おい)し此の事でおぢやはる
しなれば。翌(よく)日中(ひる)せめたならば。いくさいみなく。
ちこの程を落(おと)して。是等(これら)も明日(みやうにち)はうしなはれは
はもし心(こゝろ)ぼそくも内々でおまへ屋つゝし。親父(しんぷ)ひそかにのふ。
天守(しゆ)へまゐられて。此方(はう)へ来(こ)いやとて。母(はゝ)人我等(われら)を
もつれて。北(きた)の塀(へい)わきより。はしごをかけて渡り
縄(なは)まて下(した)へ釣(つり)さげさせて。たらひに乗(のり)て堀(ほり)をも
こうへ渡(わた)りて。おぢやつた。その人数(にんず)は。おやこちふ
らうさ。わらはをはじめ四人ばかり。その家来(けらい)は。

そのまゝにておぢやつた。城(しろ)をはなるゝ五六町(ちやう)ほど北(きた)
へ行(ゆき)し時(じ)。母人(はゝびと)はのふ。腹(はら)いたみて。娘(むすめ)をうみま
する。おなじ所に。田(た)の水(みづ)まで。うぶ湯(ゆ)つかひ直(じき)にあ
げて。はまふつみば。人々(びと)をはず親父(おやぢ)のまへにて。この
野(の)ごの原(はら)のこゝへ落(おち)さく。おぢやつた。さはなる事でおぢやる
屋(や)つゝのうちそのし漬(つ)つる。寄(より)合(あひ)南無阿弥陀(なむあみだ)仏く。
又子どもも。彦根(ひこね)のまゝ御くし。余程(よほど)よしといへば。おわきこの親(しん)
父(ぶ)さ。知行(ちぎやう)三百石(こく)とりて居(ゐ)られし。その時分(じぶん)は軍(いくさ)
この多(おほ)くて。何事(なにごと)も不自由(ふじゆう)な事で。おまへやつて。勿論(もちろん)。

用意(ようい)ハ。なん〱なくは。へもあ程ごも多分(ごぶん)。あさ夕(ゆふ)雑水(ぞふすゐ)をたべて。おじやつた。おれが兄様(あにさま)ハ折々(をり〱)山へ鉄炮(てつはう)うちに参られた。その時に朝(あさ)菜飯(なめし)をかしきて昼飯(ひるめし)にも持(もた)れた。その時に我(わ)れらも菜(な)飯(めし)をもらうて。うれしかつたゆへ。兄様(あにさま)をさい〱すゝめて鉄炮(てつはう)うちにいくとあれバ。うれしうてならなんだ。さて衣類(いるい)もなく。おれが十三の時。手作(てづくり)のはなぞめの帷子(かたびら)一つあるよりほかにはなかりし。そのひとつのかたびらを十七の年(とし)までは着(き)た

るによりて。すねが出(で)て難儀(なんぎ)にあつた。せめてすねのかくれるほどの帷子(かたびら)ひとつほしやと思ふた。此様(このやう)にむかしは物事(ものごと)不自由(ふじゆう)なる事でおじやつた。またひるめしなどくふといふ事ハ。夢(ゆめ)にもない事。夜(よ)にいり夜食(やしよく)といふ事もなかつた。今時(いまどき)の若衆(わかしゆ)ハ。衣類(いるい)のものずき。こゝろをつくし。金(こがね)をつひやし食物(しよくもつ)にいろ〱のこのみ事(ごと)めさるゝ。沙汰(さた)の限(かぎり)なことゝいふて。又しても彦根(ひこね)の事をいはるゝゆへ。後(のち)〱にハ。子ども衆に。名(な)を。ひこ根(ね)ばゞと

いひし。今も老人のむかしがたりにて。当世の子共をしめすとば。彦根を引あひに出すこと。俗説に此人よりはじまりしとなん。それ故他国にてハ通ぜず。御国郷談なる理。
右去暦。土州に親類有ゆゑ下り浪人土佐　山田喜助。後に蛹也と号す。おあんハ雨森儀右衛門へ嫁して。儀右衛門死して後。山田喜助が養育せり。喜助の為には姨母なり。寛文年中ぐらひ。八十餘りして卒す。予その頃ハ九歳にして。右の話

物がたり折々きゝ覚へあり。誠に光陰ハ矢のごとしとの也。正徳乃頃ニ。予すでに孫どもあつめて。此その話しても。むかしの話ども。ごり集め。世の中の費しめきバ。小ぜこの後孫どものむかし話。おあんハ彦根ぞく。いまの孫だち自ハひ出す孫ども。いよ／＼何をおさへやるぞ。世は時じやものぞとて。鼻でいつしらふ。ゆゑ。腹を立てがき。当世おそ流屋し。又後世いの狗らも。まだどもはつと。おかけがの外どもふかけみを理きんご。是銭をもちて孫等てよ。いうて。後ハぬだな

まいらしゝ理りいふ屋ま事なのあし。
右一應趣事実詳懸難事なかり。證人の縁とする
や。未詳。按らくは。山田氏の覚書なるべし。田中
文たち遺つ（本ノマヽ）云此所持をこのり出し（本ノマヽ）とらふなる
志の理。

享保十五年庚戌三月廿七日　谷頓守

跋御庵物語

散樂狂言師鷺台并左衛門門人某。安永年間。自大坂持来此書。且謂狂言所云比丘貞者。蓋演之也。從是此書始顯入間。余按比丘貞狂言。有之皆以余所居稱曰御庵之語。則御庵非名也。其以所居稱其人。猶僧曰御坊。娘曰御寮。今此書曰御庵。亦尼尊稱也。但事蹟與比丘貞毫不相涉。以其適同其稱。誤爲以比丘貞狂言所出。然此書由是以顯。亦可謂幸矣。丁酉十月。善庵老人題

蒋塘培書

おきく物語

田中意徳（池田家の醫也）祖母ハ。大さかの事で。よど殿よ。津

この國の人にて。名をきくとぞいひし。落城

乃日。元和元年五月七日なり。局に居申候。いま

ぐらくぢやうなどは。おもひもよらず。時よそばの粉

のこしをもらひして。その下女に申さん。是を

そば焼めして。来きとぢやけるゆゑ。そのことおい。

局台所へまゐらあぢふて。むつくりになりた

五て。やうやう申外そのほどのごこゆく。出け

かれとやかくし所望はありともありかたき思ひ全く存じ
本の所縁のはしへ出かけ人ならよく何事もえ
えんぬ思ひ出さんかへいばなるほどことわりて
尽さぬてかの思ひはかねてうへの委り性分持し
是らずし。これのきさみて。六番も三つして。秀
なる者とより拝領の品を懐中して。御意
ごころ添へ出かけ申せば。武田宗栄翁ら術き具
こも気をて。おかかはかの不見さへらざるは
始らひも。二人様かけ。女中ま。あるひは知らざ

る士の屋敷に奉公外まで。宿にかきず様にて
務まれ上おびそも心あてすはりけへとや
この気を見。写真かららの女中小めの何の志る
さまるや。このまひかされさしいそまに出かけ
女中がるいらでられかされりやう不栄翁中へ
ごもそれはもこの備ひかさず。出かけその返り
金子瓢箪の馬出るし。いのぢしておじ
わきたむこれある迄は手なものそれ。その事はなどいふやう
なるものおあちらやとすごい。まへ人してえてすて

老ては。恥辱とあらばなりとて。云てお
めぐて捨ける。それしかもすてゝやうし其所へ
出かけ。さる縁ふ竹東まえ行くども。武者もさ
つまりけだ。まつ其中城へ罷すきて見えかくまゐ
りぬ。手ありし所も。みえ不申けれ忠の御時。あかへ東
鉢のげなり。もとへまかりつゝ。着るこそのさび
ごのるな銭も出もちて来り金ままならば。出
せよとぞふめぐり懐中よ。竹なすの二本もちて
ありし銭。ゆらしつのそれ。一本七貫文おまふさて。それ

ものゝふなれば。藤堂殿浪士なり。いづれの家へなりと宮
いへば。まづ家口とかめへけるゆゑそれとなくつ
まゐりければ。まづ/\金からせる目つまり
られしとたのむ。いざ此方へと同道してま
ゐるうちに。要光院殿（京極若狭守殿 淀殿のほうぐ所なり。）母代さふらひ
ふ。おそれながらしかあらば。いあし様たちへて御
のきけれど。そのほどの女中さぬらひもつれ参りけれ
とみつたすれば。さらさきへかけぐりまより御供
まうし。森口なる在家へ。はやめぐりけ所。

こゝもむしかへしき。五三でふ。ゆるさ𛂞御
いふして。要光院殿なれば。そのうへふだん。いふ
ば生花そのもしろきおもりやひろの時いづれもか
きうりしたらむ。法例によりは飯をもちひさせみな
く。紙よのせさべかり。これは御披露殿より御渡りしな
されて。御和睦の御使まゐらせて御還そうは供の女中
御手そて御座。そのうちに。落城ゆゑや。少微家内のむすめ
のうちに秀頼公御召しつのひ女中。
是は女がからずら一つまで下おびもひとつして。
みられし由忠をきれにても難儀なるべしとて。

わが帽子おびひとつぬぎこいおびもちつきて。
その女中はまゐらせける。さて要光院殿には
家康公へ御めしに御出は御むきのひとは御
のり物なぢよみるそのとき。女中へ何らきは。
茶将軍様御ありて。いづれも女の子なれ
どもみ城中におかりゐるものにてやうる。御つ
けらはでさもおれぞかへば。御をよろこびて
くりつども免角御不知はそむきがたく御気色
のへと要光院殿おほせられしとなんその時みなみ

なきこの頼しもなきを。おもひくらし。追付此の人り
あされけるを。ほころびり此出とな。きこうちの小事
すみけて何ぞも。みなのぞみ次第いづれへも。
おく程つのはまで命ずよし。上意と安緒ずみな
ら給ふおゆるず。かぎりなくしろのちさ。おくの松丸
成く。まかり此はんとぞん。京都へとてぞ参り
たるさて。ゑ宮内もとめをいづの事へ行づき
ごら給もおぼつかなく此る。御所まかたのまれ
此申ゑ。一所まし京へ参けて。大さこのまで知る

町人へ。かくれて。まゐる所。法様までは。の給く
存此町人まで此へ。我ことの外大きに頼みる町人小
それ。あのほどにも大さの外藤人。中点一枚も得
どめけさだ。きの。病人へ。晒布一疋つて。引出ものに小袖
しけるほどにて。あく人。織田なの殿の御きへまゐる
つまりへ。おもなのし。門内へも入りかさだは家内姫
はなの殿姫中点菊中はかみ八。是は法姫まで
此あそれまで。ほ入なまや。つもりて付ますで内へ
申いさられければ。こその部屋庭まで。たの殿め

ひなもひらり。其後ひめりとて。舞のほかの禮まで
ありし。故の五日左門どの〻。道蔵のうち〻やし
げふる二階へ行の裡二人ふれしおり申けるま
て。ちまつ私なずじ雜へやけせそ。いさ白やて。松丸
殿へまゐりけるんとも。時左つぎのさとのほこの禮
まそ。かこびらふ銀子五枚あまはりけるさて。書
の丸殿の秀吉公の家へ。はま公いゝしおりけるそのちふ。
意治祖父ゝろぐ。孫つきゃれ後備前へまゐりて。志
小〻れやけ。吾そば焼いゝしまい。塗しけ女をいゝこ

なりけるやらむ。ちつら其やけ人の語に。秀頼公よ
り殿。そのほかの大蔵卿。おもあちけ法すね井八。
みな。山里へ。まゐられけて清大丸に。奥二居けれ。
秀義ハはや落城二三日まへより飛る由志活生
死のほど。いのぐいおかけ由こけ。
一その落城のまへ二のぶじ。鉄砲いづくの内やらか飛
まゐり。女中うちぬの肩その跡ぬ玉。活產子乃
わきあいら腹を痛。玉ぬ通りける耳の毛切き
けりし。その年二十月ばのりごやけ手ぬうちへ

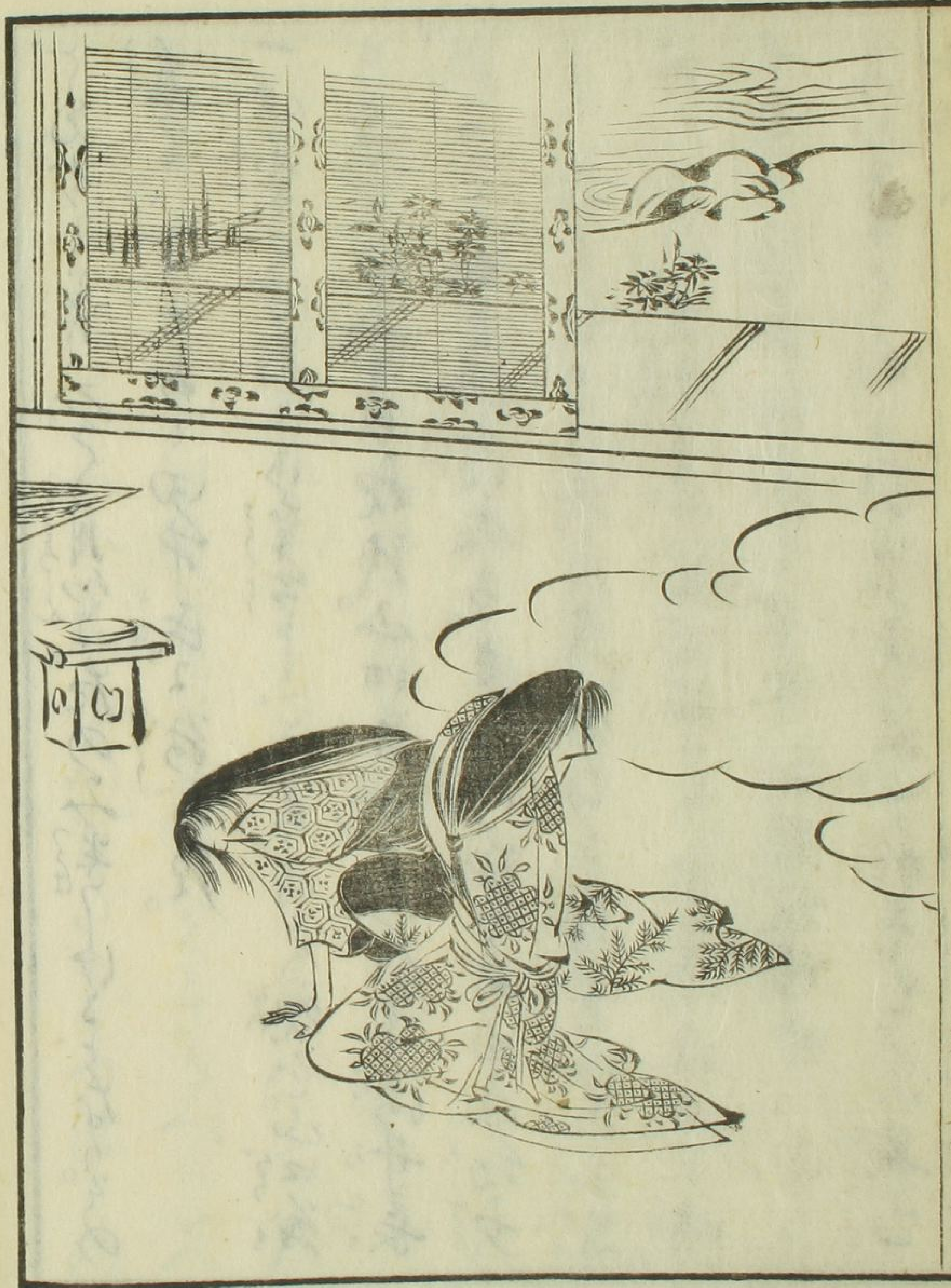
梅畦叢書

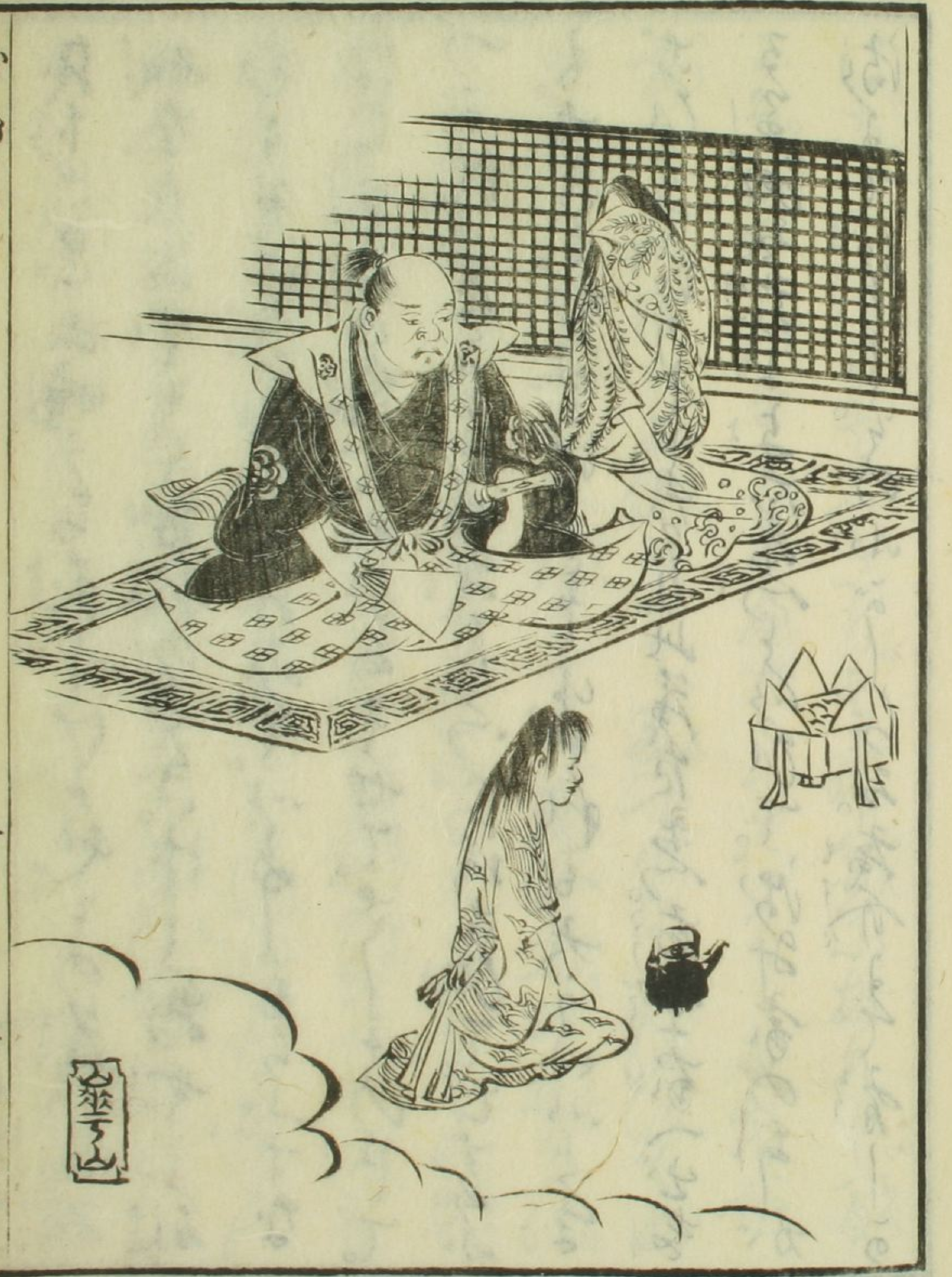
いまで見せゆまなるほど。その程(ほど)の事存(ぞん)ぜら
れ候。それしからばその人さまの菓子(きさ)かくまで。幕(まく)張はら
さま申候。
一 いにしへ作評定(ひやうぢやう)。毎度(まいど)ほ内所(ないしよ)まで。ひろしゆゑ高、
けるにそあるべしとなり。
一 あ白く(まいまち)。やはりはじめにそのしれたるとおかしその餅(もち)
さみなく。ながる坪(つぼ)の法同様ごとく。くばられけ
るぞの志のめこそもち銭朝(あさ)まやくるはつゞきて
乃まへに一つ宛(つ)並(おい)て道(どう)めちらしハめづらしこの

らぬその心ゆゑ。そのまゝ妙白(みやうまち)まで奥(おく)もありし
このころ上臈(じやうらう)まゐるに餅(もち)を進らせ。敷へ出てこのたびおいて又
今日(けふ)持もち銭おきけるとぞ。
一 天樹院(てんじゆゐん)様ほどんその義ありも見えけるとの碁盤(ごばん)
のうへあり。法あちら流(る)れふさ小すこし秀(ひで)より公(こう)たのうな
ぶるなふて。法のみをすこし所々に見えさ
れけ侍(し)ごなり。
一 禅(ぜん)僧をば。おきしゆゑより出(りう)ばれを所手(て)なぞのゑ
のうなごりそれじ後。誠十徳乃まのどく味(み)とい

あし。備へあればしうへわたさでときく。よしみ
ごみとの毒味をして出しけるなり。
一そのらく城まん京都より月心和尚といふ
東福寺の出家をねてまゐり拝りやせられ
その人は。きく中は。八まで。八尾のそて。にいらまぬ
ごのひやゐて。京都への帰りて中は百それまでさ
社を御あづかり。くごせらるべくとて申しそめうち落
城をもはず。ちかれあとも。ごらうひ下さるべくとん
とて。快菜ひとつふ。きゐ。あたまへまうつはその

どもおくられ。月心はたのみ参らしけるとなり。その
道具は。いまそ出て田中氏に預けあり。
一代筆なる品は御孝公申されしきく親なる山口茂
左衛門といふその親族山口茂介といひて浅井長
政よりつかへたる淀殿に。其後乃むすめ御息幼女
より。御幸公申上茂左衛門のちは藤堂和泉守高
虎へ。浪人ありまて三百石下せ居申けり飛る時
大坂御陣に御法をうて。お目坂城中へ参り
御幸公をねがひゆるされ。すれまち御具足





我下さきし。此時うち死しけるとぞ。その落つき。不
知なり。浜田ぞく拝領のたきゝけし持置しゆゑ。
もまぢのきく我身をみて。ひそかに申しあらふすな
はち。白あうの絹おゝぬひあはせて。さしそのはして。
つのはしたる。その時茂たらつくろひたびてむすめふ
も。大きなかるまける。中にもそれも。大かたゞいらさま
おひまでたまはりしとなり。此茂左衛門は藤堂家へ出仕を
するに子細ありて与右衛門といひて。浅井家のあしが
るにてありし。その小のしらる。娘までて有しの

ば。おきくの母のこゝろみずなり。家嬬貧にありし。相
まゝ朝のこれなきも。あな屋せざるにかなりしに。茂介
妻。ことの母の不便にかりて。茶づくなどたびたびぬ
るまゝひけるまゝ。それ故後までも。茂介妻の恩をば
ことを絶ぬとぞ。その序もとまらなし。此よしの故
茂左衛門つたふも。よび出し。志のも客免にて。何の
家中にて。殿あしらひよ。志りけるとなりしこれ
茂介もの。のちに千二百石まで。浅井家にてとり
たるとなり。此茂左衛門悴きくの。おいて残甚左衛

門とひて。安藝の國にいたり。のちに醫者とな
りて。玄朴といひけ。流行しけるぞ。その志あるやうしら
ず。久しく壽乃ときに二千余のたくはへをのこして。死け
るとき。い十三歳なり。この医は菊はなしをもちゐる
とて。後意徳をのがれなり。此意徳とのみはき
くごの孫なりしとなるす。おまへら希ふ孫なる医
し。是よりて。かんぢのう治て。浪華城乃廣大なる鍾
ぢらの微にたるよ。法まれなる人智ものにて。名りが
ふつきるのとなひてされども。この道をもて。以まに上

しなば。まうきかべきて。とれるべし。さもなく。この
の菊女なき。浅井家よりて。このたばさて。ひ人
らさる治よりくける病なくそ多く天樹院
後にたびたんまばたも。もなりしほどなならん。に
さ。いとも近くをり。光はまん格式も。なりなる
居し。ゆゑなき。なぎのつぼ弥より。一婢は名じ。そば粉
た焼き。御ごい所へ居りしかても。さりとてごのるく。
程ちこの費へるべし。まさ月は心まあづからりし
も。宝暦の用に洞度衣服なるべきこのわづこの様端

ひとつとして不便(ふイ)なる事のみ。もち出(いだ)さんとするにあやまち
しらぬ時(とき)なるべけれど。今(いま)にては似合(にあひ)なき様(げ)なるに。
おそは礼も無(ぶ)しきの御縁(えん)のはなし出(いづ)させば。いづ
かくそよくつれ様することしありて。おかるもこの旨ある
なる事なるべし。かくふき城(じやう)内(ない)をかけいづれにて
てみちは案(あん)内(ない)し給(たま)ん。いかのしきる事なり。
すでにかの御(ご)城(じやう)内(ない)出(しゆつ)生(せき)の此ごろ大(おほ)かたかく女(ぢよ)
中途(ごはう)にそれより出(い)でとこは去らば狼(らう)狽(ばい)し
ありし故バ。将軍(ごひい)停(づのゑ)庭にてそ図(づ)まで出て

いにしへにまで。ひとつ道理(どうり)まで。たく其わうらがへし
て。御(み)道(みち)目(め)出(で)るしとせられしふりてやうく。
雑(ざつ)をしまぬの道たり。されど御用(ごよう)達(たつ)ある御(ご)座(ざ)いく。
此役(やく)のうちぬるならで。いふなかれ。かゝり大(おほ)きこの
一様(じやう)となりて。太閤(たいかふ)の御代(みよ)よりこの手(て)様(さま)く。
ありたるべけれど。清(せい)器(ぜん)などもぬて清(きよ)つるさまも。
種(うゑ)ことしくおぼゆ。それども土さらば。太(さい)平(へい)日(ひ)いまだ
ひけしうらけるなども。いふ苗ぞ。それかゝりしも。い
其(ず)のしきは。秀(ひで)かゝり公(こう)なさもまた印(じゆ)。始(はじ)め夜(たう)夜(ぢやう)

鈍ともに。津川左衛門忠行が。つかさどる所なり。
この菊に。娘女孫手をこのりてかづらふの寸哉。
このくせしかや。この流さまにてとかくに活和睦
のおど。ゆのほつまし。時運とハ。いひなごのらうして
かりしるなり。よれいまき。に縫筆行。覧主馬良
列ハ。あづかる古語の黄硯を。の為しおてまつ
りて。自害し。左近も。謀反ぶ流し哉。の為し
起く。腹きりしくまし。諸書にのきくりいづき
この為じし美やしら妻。わきハ。たぬまきく女の

諸説実ならんおとをはづるあり。

右阿菊物語一巻余得諸之友原念齋念齋家久蔵斯書但未詳其所出云今按叙十字朴率文字修飾皆其所身經目睹非傳聞也當時謂豊太閤趣於微賤掌握天下故務運筆靡廣修奉養以明得志於今以時攷

之城中仕女若阿菊者衣服飲食真素廉略如此而紀則其窮奢極欲何足道也要之亂餘時勢自爾在今承平日久縦欲富貴而不知屬饜者其可不念哉丁酉十二月善庵老人題

秋巌萩原翬書

東京書肆

北畠茂兵衛
小林新兵衛
大倉孫兵衛
丸屋善七
吉川半七
水野慶次郎
小林喜右衛門
吉田久兵衛
中西屋邦太
別所平七